

ナチュラルキス  
新婚編 4

*S a b o k o & K e i s b i*

---

風

*fuu*



エタニティ文庫

## Contents

ナチュラルキス  
～新婚編4～ 5

書き下ろし番外編  
色々あっても楽しい週末 335

ナチュラルキス  
～新婚編 4～

## 1 お楽しみみの選択　　（沙帆子）

「ふわわあゝっ」

目覚めた途端、大きなあくびが出た。

横向きに寝ていた佐原沙帆子は、もそもそ動いて仰向けになる。ぼおっとしつつも、ゆっくりと瞼を開けた。

ほんやりした光がカーテンの隙間から差し込んでいる。

う、うん……もう、朝……？

静まり返っている室内に、微かな寝息が聞こえる。

ハッとした沙帆子は、急いで寝息が聞こえるほうに顔を向けた。

黒いパジャマを着てそこに寝ているのは、もちろん沙帆子の夫の啓史だ。

さ、佐原先生、まだ寝てる！

これって、望んでいた状況を、ついに迎えたってこと？

や、やった！　心の中で叫び、ぐっと拳を握る。

わたし、ようやく、ようやく佐原先生より早く起きられたんだ。

沙帆子は、なかなか啓史より先に目覚めることができず、毎朝がっかりしていたのだ。

それが……やっと念願が叶った。

喜びを噛みしめつつ、沙帆子はそっと身体を起こした。そして、啓史を見つめる。

うん、すやすや寝てる。はあ、嬉しいなあ。こんな風に先生の寝顔を見られるなんて……

眼福♪

しばらくの間、惚れ惚れと眺め続ける。

触れてみたいが、そんなことをしたら、きつとすぐに起きてしまうだろう。見つめて

いられるのは彼が寝ていればこそだ。こんなチャンス、みすみす逃してなるものか。

それに、今朝はゆっくりできる。

なぜなら、今日は日曜日。啓史の実家と、彼の伯父夫妻が住む橘家に行く予定だが、

家を出るまでには、しばらく時間があるのだ。

うーん、でも……ベッドの端と端で寝ていたとは……

どうせなら、べったり密着して目覚めたかった。啓史の腕にやさしく包み込まれてい

たなら、天国にいる気分を味わえたのに。

それにしてもよく眠っている。完全に、無防備状態だ。

そう思ったら、ドキドキしてきた。

いまなら、なんでもやり放題なんじゃないか？ どこでも好きなどころに触れられる。あつ、けど、触ってしまったら起きる可能性が高いから、チャンスは一回しかない。どうしよう？ 何をしよう？

前髪に触れたりとか、耳たぶをそつと口に含んだりとか……  
きゃーっ！ 駄目駄目、いくらなんでもそれは大胆過ぎる。

なら、首筋を撫でるとか？ 指で唇をなぞるっていうのも捨てがたいかも。  
自分で作った大胆な選択肢に、鼓動がどンドン速まっていく。

よ、よし！ 唇をなぞってしまおう。そう決めた途端、急激に緊張する。

こくと喉を鳴らし、沙帆子は啓史の唇に指先を近づけていった。

唇まで、あと一センチ。緊張はさらに高まり、指先がブルブルと震え始める。

沙帆子はさつと手を引いた。

ここはいったん落ち着こう。うん、そうしよう。

自分をなだめたあと、啓史に顔を近づける。まだ起きた様子はなく、安堵あんどした。

そうだ、いままさに寝顔の写メを撮るチャンスではないか。寝顔の写メは、すでに一枚ゲットしているが、このベッドに寝ている啓史の写メはまだ手に入れていない。

あつ、でも……携帯を居間に置きっぱなしだった。

まずそれを取ってこなければ、話にならないのだが、沙帆子は窓際に寝ていたから、

彼をまたがないとベッドから下りられない。……でも、そんなことをしたら啓史は絶対に起きてしまう。

残念だが写メは諦めるしかない。となると残る楽しみは、啓史が目覚めるまで寝顔を見ているか、一発勝負で触れてみるか……

うーん、そうだな。やっぱり触れるのはやめて、ここは寝顔を楽しむことにしよう。

そう決めた沙帆子は、むふふと笑い、ベッドを揺らさないように気をつけながら両手をつけて、啓史の寝顔を眺めた。

しかし、この状況……本当に不思議だ。佐原先生のベッドにいて、彼の寝顔を覗のぞき込んでいるとは……

わたしが佐原先生のお嫁さんだなんて、冗談みたい。

次の瞬間、彼女はその考えを頭の中から追い払った。

いやいや、これは現実なの。わたしは佐原先生の妻なんだから、遠慮せずに、もっともつと大胆でもいいはず……

いっそ、唇にキス……しちゃうとか？ そう考えただけで、ポツと顔が燃える。

考えたら、昨夜、先生に抱きついたあげく、『先生、大好きっ！』なんて、口走ってしまったんだった。は、恥ずかしい！

だって、先生が白衣を着てくれるっていうから……

白衣を着た先生を撮りたいとか、白衣を着た姿でぎゅっと抱き締めてほしいとか、言っちゃったんだよね。あのあと、恥ずかし過ぎたものだから、照れ隠しにゲーム機のコントローラーを掴んで、つい余計なことを言ってしまった……

『今夜はいいさ手加減しませんからねえ』

あんなクソ生意気な口をきいてしまうとは……

すべてはテンパっていたせいなのだ。

佐原先生は大人なんだから、そういうわたしの気持ち<sup>ぐ</sup>を汲み取ってくればいいのに、マジでキレちゃって……

『ちょっと手加減して、楽しませてやるかと思ってたのに……。お前がその気なら、手抜きなしでやってやろうじゃないか』

そしてその言葉通り、いいさ手加減してもらえず、ゲームの結果は散々だった。

そうこうしていたら急に睡魔に襲われて、ゲーム中なのいつの間にか寝てしまったのだ。

身体がゆらりと揺れて驚いて目を覚ましたら、なんと沙帆子は啓史にお姫さま抱っこされていて……

心の中でキヤーキヤーとピンクの悲鳴を上げていると、啓史がでかうさを脅し始めたものだから、つい薄目を開けて様子を窺った。

そうしたら先生と目が合っちゃって……ぎよつとして、慌てて寝たふりをしたんだけど……あれは大失敗だったな。思い出すだけで恥ずかしい。

そんな感じで色々あったけど、寝室に運んでもらったあとは、すつこいいムードになつて……

だ、駄目駄目、この先は思い出しちゃ駄目。

沙帆子は自分の頭をポカポカ叩いた。

## 2 天秤<sup>てんびん</sup>にかけたうえでの決断 〈啓史〉

身体が揺れているような気がして、啓史は目を覚ました。

なんだ？

眉を寄せ、<sup>まぶた</sup>瞼を薄く開けてみたら、沙帆子がベッドの上に座り込んでいた。

なぜか彼女は、自分の頭をポカポカと叩いている。

「お前、何やってる？」

声をかけると、沙帆子はピタリと動きを止めた。両の拳<sup>こぶし</sup>を頭に当てたまま、啓史に目を向けてくる。びっくり顔で固まっているのが笑えてならない。

「どうして頭なんか叩いてる？」

「いえ。そ、そのお〜」

目を泳がせた沙帆子は、頭の上の拳をそろそろと下ろす。

「ちょ、ちょーっと、その…叩きたくなっちゃったというか」

「なんで、叩きたくなったんだ？」

「な、なんでって…べ、別に、これといって理由は…」

「嘘をつくな。ひとは理由もなく、自分の頭を叩いたりしないもんだ」

「そう突っ込んだら、彼女は不服そうな顔をして黙り込んでしまった。

「おい」

返事を強要するように呼びかける。

沙帆子は一瞬ビビった様子を見せたものの、啓史を見つめ返してきた。

「先生、もう起きますか？」

「まだ俺の質問に答えてないぞ」

答えをさらに促すと、逃げ場がないとでも思ったのか、沙帆子はベッドに突っ伏した。

「なんなんだ？」

呆れてしまったが、突っ伏している沙帆子の格好が面白くて、笑いが込み上げてくる。

自分が隙だらけだっことを、こいつはわかっているやうだ。これでは、さあ好き

にしてくださいと言っているやうなもの。

さて、どう料理してやるうか？

にやりと笑った啓史は、沙帆子の背骨に沿って指を滑らせた。

「はひっ！」

沙帆子はおかしな悲鳴を上げて、起き上がるとする。もちろんみすみす逃す気のない

啓史は、彼女の細いウエストをぐっと押さえた。

「な、な、な…何するんですか！」

「何って、お前の腰を押さえつけてるけど」

「そんな当たり前の答え、求めてません！ 放してくださいー」

「頭を叩いていた理由を話せ。そうしたら、放してやるう」

「そ、そんな条件ずるいですよお」

「別にずるくはないだろう」

会話をしている間も、沙帆子は啓史の手から逃れようと、躍起になってもがいている。

本当に非力だよな。これっぽっちの力で押さえただけで、身動きできなくなるんだか

らな。

「せんせー、放してくださいい」

啓史は押さえつけていた手を離し、ジタバタしていた沙帆子を仰向けに転がした。

「きやつ」

可愛い悲鳴を上げるその様は、まるで餓い主に遊ばれている子犬みたいだ。

「ずいぶんと反抗的じゃないか？」

啓史は沙帆子の目を覗き込みながら、脅すように問いかける。

「そ、そんなつもりは……」

「ほら、さっさと話せ」

「だ、だから話せません」

「ほお。つまり、お前が自分の頭をポカポカ叩いていた理由は、俺に話せないような内容なわけか？」

そう言っていると沙帆子は急に起き上がった。

「先生、もう起きないと。今日は先生のご実家と校長先生の家に行かなきゃならないんですし、早く朝ご飯の用意を……」

四つんばいでそんなことを言いながら、沙帆子は啓史の身体を乗り越えて、ベッドから下りようとする。

そうはさせるか。

啓史は、沙帆子の脇に腕を突っ込み、たやすく動きを封じた。

「ああっ」

そしてそのまま沙帆子を胸に抱き込み、ベッドに胡坐あぐらをかいている自分の膝に、彼女を座らせる。

「せ、先生」

「休みなんだし、朝飯は遅くていい」

もう少し沙帆子と密な時間を過ごしたい。

「あ、あの、それじゃあ、いまから昨日の約束のほうを……ひとつ」

「昨日の約束？」

「は、はい」

期待するような目を向けられるが、なんのことか、ぴんとこない。

「先生、あれです。ほ、ほら……その……は、白衣を……って約束です」

言いづらそうに、もごもご言う。

白衣か……そうだったな。こいつ、白衣を着た格好で抱き締めてほしいとか、白衣を着た俺の姿を写メに撮りたいとか言ってたんだよな。

さほど拒むような願いではないのだが……いまはそんな気分じゃない。

「先生？」

すでに心の中で却下したというのに、目の前には、瞳に期待を込めた奴がいる。

啓史は顔をひくつかせた。

密な時間を楽しむつもりだったが……  
天秤てんびんにかけ、決断する。

「やっぱり腹が減った。朝飯を食おう」

沙帆子をひよいと膝から下ろした啓史は、さっさとベッドから出る。

「ええーっ！」

沙帆子の抗議の叫びが聞こえたが、啓史は構わず寝室から出てドアを閉めたのだった。

### 3 笑いにひと苦勞 ー沙帆子ー

寝室のドアが閉まり、沙帆子はぷーっとほったたを膨ふくらませた。

白衣を着てくれるって約束したのに……逃げるなんて。

はあつ、おねだりするタイミングを間違えたなあ。

珍しく甘い雰囲気になったから……いまだ！ って思ったんだけど……

啓史の気持ちはなかなか読むことができない。

それにしても、もつたいないことをしてしまった。せつかくの甘いムードも、おじゃんにして……

考えれば考えるほど惜しくなる。後悔先に立たずか……

沙帆子はしょぼくれて寝室を出た。

「先生、何時に家を出ます？」

トーストにりんごジャムを塗りながら、沙帆子は啓史に尋ねた。

「そうだな……向こうには十時過ぎくらいに着けばいいだろ。九時半に家を出るか？」

「そうですか」

まだ七時半だ。二時間あれば、気になっていたクローゼットルームの整理ができる。

結婚式のあと、持ち帰った荷物を運び込んで、そのままの状態なのだ。あそこで着替えるたびに早く片付けたいと思っていた。

「先生、わたしクローゼットルームを片付けたいんですけど……」

「そうか。なら、俺は他の部屋を掃除しとく。花の水も替えておくから」

居間に飾ってある花に目を向けながら啓史が言う。

「はい。お願いします」

活けてから一週間経つが、充分綺麗だ。

「まだ凄く綺麗ですね。先生がこまめに水を替えてくれていたから……」

「水を替えるくらい、簡単な作業だからな」

そっけなく啓史が言う。

啓史はなんでもないことのように言うが、そういう簡単な作業も、仕事で疲れていたりすると、面倒になったりするものだ。結婚式場から持ち帰った花だからこそ、大事にしてくれているように思えて嬉しくなる。

沙帆子は胸を弾ませて、りんごジャムをたっぷり塗ったトーストをバクツと食べた。ほんわかした甘味が口中に広がり、さらにしあわせな気持ちになる。

「沙帆子」

「はい？」

なにやら急に深刻な口調で呼びかけられ、少々驚いて返事をする。

「あの、なんですか？」

「いや……昼飯のことだが」

その言葉だけで、沙帆子は啓史の言いたいことがわかった。

啓史は甘い物が好きではないのだが、なぜか彼の母である久美子は、息子は甘い物が好きだと思い込んでいるのだ。そのため、いつも啓史の料理だけ甘い味付けにしてしまう。

そんなわけで、啓史の実家に行き、久美子の手料理を食べることになったら、料理を取り替えてほしいと頼まれていた。

「わかってます」

「だが、そう簡単にはいかないんじゃないかと思う。そのときは、もういいからな」  
うーん。確かに先生の言う通りかも。

気づかれないように、ふたりの皿を入れ替えるなんて、口で言うほど簡単ではなさそうだ。

「でも、頑張ってみます！」

拳を握って宣言したら、啓史が苦笑する。

「だから、頑張るなって」

否定されて、沙帆子は戸惑った。

「簡単に入れ替えられそうなら頼む。だが、無理はしなくていい。沙帆子、わかったな？」  
啓史の思いやりに、沙帆子は胸がジーンとした。

「は、はい。無理はしません」

「うん」

啓史は頷き、安心した表情でコーヒーを飲む。

胸をいっばいにして、朝食を食べていた沙帆子は、ふとあることを思い出した。

「先生、お化粧はどうすればいいですか？」

「ああ……そうだな。……一緒に外出するんだし、助手席に乗っていくなら……」

「したほうがいいですか？」

気乗りしない口調で言ったら、啓史が眉を上げて沙帆子を見る。

「なんだ、お前、化粧をしたくないのか？」

「その……テッチン先生にお会いすることになるなら……」

「徹兄？」

啓史の兄である徹は、沙帆子の中学の時の担任なのだ。啓史の実家を初めて訪問したとき、沙帆子はぼつちり化粧をしていった。すると、徹に化粧のことで咎められてしまったのだ。そのことを思い出すと、気まずい思いに駆られる。

「……お前が嫌なら、やめておくか？」

「いいんですか？　でも、車に乗っているところを誰かに目撃されたら大変だし、……あつ、なら、後部座席に寝転がって隠れています」

「いや、それはさせたくない」

「先生……」

「そうだ。帽子はないのか？　顔が隠れるような深めのやつ」

「帽子ですか……ないこともないですけど」

顔がどこまで隠れるかはわからないが……いくつか持ってはいる。

「それじゃ、クローゼットルームを片付けるついでに、探してみます」

このマンションに沙帆子の荷物を運び込んだとき、それなりに整理して片付けたはず

なのだが……そのときの記憶が少々曖昧なのだ。

あの頃のわたし、先生との結婚やら両親の引越やらで、頭の中がいっぱいで……

「よし。それじゃ、さっさと食べて、取りかかるか？」

「はい」

沙帆子は明るく答え、朝食を急いで口に押し込む。

「お、おい、慌てて食うな」

「ふひまふえん」

『すみません』と言うつもりが、頬張り過ぎてまともにしゃべれない。

「まったく何やってんだ。ほっぺたまんまるに膨らませて、お前ハムスターみたいだぞ」  
くっくつと啓史は楽しそうに笑う。

顔を赤らめて彼を睨んだものの、すぐに笑いが込み上げてきてしまう。おかげで、口の中のものを嘔き出さないようにするのに、沙帆子は苦勞した。

#### 4 様変わりした部屋（啓史）

沙帆子が片付けのためにクローゼットルームに籠っている間、啓史は掃除機をかけな

がら考え込んでいた。

化粧のことで、沙帆子は徹に対してかなり引け目を感じているようだ。今日は帽子を被ることにして化粧をしないことにしたが……用心のためにも、出かけるときは常に化粧をしたほうがいいと思う。

今日、徹兄は家にいるのだろうか？

徹は中学の教師をしている。休日も部活の練習があつて留守にすることが多い。

啓史は掃除機を止め、ポケットから携帯を取り出して電話をかけた。

呼び出し音がしばらく続くが、徹はなかなか出てくれない。

徹兄、いまは忙しいのか？ それとも運転中とかかな？

諦めかけたそのとき――

「よお、啓史」

「徹兄、いまいい？」

「ああ。それにしても、なんか久しぶりだな」

徹の陽気な声に、啓史は小さく笑った。

啓史と徹が話すのは、結婚式の日以来になる。後日、式の写真をメールで送ってくれたのだが、その礼はメールで伝えた。電話で話すことさえも照れくさかったのだ。

でもそれは、徹も同じだったろうと思う。

結婚式の夜、徹からかかってきた電話でのやりとりを思い出し、噴き出してしまいそうになる。初夜を迎えるにあたり、なにより必要なブツがないことにヘコんでいたところに電話がかかってきたのだった。

徹兄にはありえない、実にしどろもどろな口調で……

「おい啓史、何を笑ってる？」

咎めるような声が飛んできた。笑いを堪えていたのだが、伝わってしまったらしい。

「いや、わざわざ言わなくても、わかるだろ？」

「むっ……お前な！ ま、まあ、いい。そのことについては……。とにかく、仲良くや

れるのか？」

「俺に聞かなくても、色々なところから情報が入ってるんじゃないのか？」

「まあな。しかし、幸弘ゆきひろさんはいいな」

声を弾ませて徹が言う。唐突に出てきた沙帆子の父親の名に驚きつつも、頷く。

「だろう」

「ああ。話していて面白い。向上心まで湧く。親父も尊敬しているが、ああいう親父もいいなと思ったな」

「そうか」

幸弘のことを褒められ、啓史は、自分が褒められる以上に嬉しくなった。

「そうそう、学校で騒ぎになってるって……」

「それについては、そっちに行ってから話すよ」

「わかった。それで、なんで電話してきたんだ？」

「ああ、うん。あの、徹兄は、今日は実家にいるのか？」

「いるぞ。色々話を聞かせて……いや、まあ……慣れたいってのが本音だな」

「慣れたいって……沙帆子が俺と結婚したこと？」

「そういうことだ。どうにもまだ、お前とエノチビが結婚したことを受け入れられてない。お前たちの結婚式には出たが……ほら、エノチビの奴、化粧をして別人みたいだったろ？ だから、こう……な？」

わかるだろうと同意を求めるように言う徹に、啓史は「ああ。わかるよ」と答えた。

同時に、慣れたいと思ってくれる徹を、ありがたく思う。

「俺に比べて順平は順応性が高いぞ。兄嫁が来るってんで、大はしゃぎだ。幸弘さんが

家に来たときは、借りてきたネコみたいにおとなしかったが……」

「なんだ、順平の奴、まだ幸弘さんのことを怖がってるのか？」

「どう対応していいかわからないだけだろう」

徹の言葉に苦笑した啓史だが、こんな話をしている暇はないんだっと思い直す。

啓史はさっそく、用件を切り出した。

「徹兄、話しておきたいことがあるんだ」

「うん、なんだ？」

「俺と沙帆子が結婚したことは、あいつが卒業するまで隠し通さなければならぬ」

「それで？」

「ふたりで出かけるときには、学校の登下校時もだけど……俺たちの姿を目撃されてもバレないように、あいつは化粧をすることになった」

「そうか。そういうことなら仕方ないだろうな」

徹は本当に仕方なさそうに言う。やはり、自分の教え子である沙帆子が化粧をするこ

とは、受け入れ難いようだ。

「うん。だけど、沙帆子は徹兄に化粧した顔を見られるのが辛いようなんだ」

「ん……そういうことか」

徹は悔やむように言う。

「あのとき、手厳しく叱っちゃったからな」

結婚の報告のために、沙帆子を初めて啓史の実家に連れていったとき、彼女は化粧をしていった。徹は化粧をしている沙帆子を見て、こっぴどく説教をしたのだ。

「さっきも、化粧をするのを嫌がった。今日のところは、帽子を被っていくことにしたけど……」

「そうか……わかった。それについては、エノチビと話をさせてもらおう」

「よろしく頼むよ。ああ、それと……写真、送ってくれてありがとう」

「おう。写真集のほうも見たのか？」

「芙美子さんに見せてもらった。ところであの写真集って、余分はないかな？」

「お前たちの分は、今日渡すつもりだが」

「もう一冊欲しいんだ。昨日、芙美子さんの実家に行ったとき、お義祖母ばあさんに渡し  
しまったから」

「えっ、あれを渡した？」

徹は驚いたらしく大きな声を上げ、さらに急せくように尋ねる。

「訪問するとは聞いていたが、結婚したことも伝えたのか？」

「芙美子さんの母親だけだよ。芙美子さんも、母親には隠し通せなかったようだった」

「それで、大丈夫だったのか？」

「ああ、受け入れてくださった。結婚も、俺のことも」

「そうなのか、よかったな」

ほっとしたように徹は口にする。

「それじゃ徹兄、十時過ぎにはそっちに行くつもりだから、またそのときに」

「ああ。じゃあな」

通話を切り、携帯をポケットに戻した啓史は、沙帆子のいるクローゼットルームを  
窺うかがった。

どんな様子か一度覗のぞいてみるかな？ いや、掃除機をかけ終えてからにするか。

啓史は足元に置いていた掃除機を取り上げ、居間の掃除を再開する。

ソファの周りを掃除していると、ピンクの物体がどうにも気に障さわってくる。無視しよ  
うとしても、どうしてもピンクが視界に入ってくるのだ。

「この野郎！」

啓史は振り返って、右腕を振り上げ、でぶクマを威嚇いかくした。

「存在感を消せっ！」

怒鳴りつけるが、ふてぶてしい顔で啓史を見つめ返してくる。

「それにしても、お前、もっと可愛く作ってもらえなかったのか？」

腹を立てていたはずなのに、つい同情を滲じませてしまった。

「ただ、沙帆子たちは揃そろって可愛いと騒さわいでいたな。まるで理解できないが……女の  
好みは、男とは違ちがうってことか？」

でぶクマから視線を逸らし、今度は、飾り棚の上に置いてあるフリフリの物体を見やる。  
母、久美子がつ作つくってくれたリングピローだ。これを目にするたび、なんとも照れくさ  
い気分になる。

啓史は、改めて部屋全体をじっくりと見回した。  
ゴミ箱に活けられた薔薇の花にピンクのでぶクマ、オーストラリア土産のコアラに、  
リングピロー……

笑えるな。これがいまの俺の部屋とは。

敦が見たら、大騒ぎして俺を冷やかすだろう。もちろん、あいつをここに招く気はないが……

親友である敦から、深野の婚約祝いに沙帆子も連れてきたらどうかと提案された。化粧をしていけば、高校生だとはバレないだろうが……俺のダチとの飲み会に参加しても、沙帆子は楽しめないに違いない。それに緊張するだろうし……一緒に行くかとは誘えないよな。

けど……会わせておきたいなと思うのだ。

まあ、この件についてはゆっくり考えよう。

## 5 ミッション大失敗 〔沙帆子〕

沙帆子は唇を突き出して、首を傾げた。

いましてが啓史の声が聞こえたのだが、沙帆子に呼びかけたわけではないようだ。先生、電話でもしてたのかな？

沙帆子はクローゼットルームを見回し、次はどこを片付けようかと迷う。

ウエディングドレスの入った箱が、かなり場所を取っている。

……これって、一度クリーニングに出したほうがいいよね？

でも、クリーニング屋さんで対応してくれるのかな？

持っていったものの、店頭で『こんなものは無理です』と断られたら恥ずかしい。

うーむ、ママに相談してみよう。

さてと……あとは？

沙帆子は床に置いてあるピンクのバスケットを見つめ、考え込む。この中には、啓史には内緒のお宝写真が入っている。彼に気づかれないように自分の机の引き出しに移動させたいのだが、いまだに移動させられていない。

バスケットの前にしゃがみ込んだものの、掃除機の音が近づいてきている。

先生、廊下の掃除に取りかかったみたい。……いまは無理だな。片付けながらチャンスを窺うでしょう。

床に置いてある物をいくつか片付けた沙帆子は、アイロンに目をやった。アイロンとアイロン台は、これから毎日使うのだし、出しやすいところに置いておくほうがいいな。

あつ、そうだ。洗濯物を取り出してきて畳たたまないと。夕べ、風呂上がりに乾燥させてそのままで。

ドアを開けて廊下に出てみると、啓史は仕事部屋の掃除をしているところだった。開いたドアから掃除機をかけている啓史を覗きつつ、洗面所に向かう。

ついつい足取りが弾んでしまう。だって洗濯物の中には、啓史の白衣もあるのだ。ドラム式の洗濯機の扉を開けて中身を全部取り出し、クローゼットルームに抱えて戻る。

沙帆子はウキウキしながら畳み始めたが、最初に手に取ったのは、もちろん白衣だ。きやはーっ、先生の白衣♪

アイロンは今夜にでもかけることにして、丁寧ていねいに畳んでおく。

それにしても、白衣を着るといふ約束を守ってくれる気はあるんだろうか？

でも、あまりしつこく言ったら、機嫌を損ねてしまいそうだ。ここは慎重にいかないと……

次の洗濯物を手に取った沙帆子は、思わずぎよっとしてしまった。

こ、これは、佐原先生の……

黒いそれを、沙帆子は顔を赤らめてパパッと畳んだ。

こういうの、いつまで経っても慣れられそうにない。照れくさいっとならない。

洗濯物をすべて畳み終わった沙帆子は、ドアを静かに開けて啓史の様子を窺うかがってみた。寝室のほうから掃除機をかけている音がする。

よし、チャンスが巡ってきた。沙帆子はドアを閉め、ピンクのバスケットに飛びついた。

何度も失敗してきたけど、今日こそはこのミッション、無事にやり遂げよう。

沙帆子は鍵を開けようとしたが、気が急せいでいるのか、なかなか開けられない。

落ち着けえ、落ち着くんぞ。

一度ゆっくりと深呼吸してから鍵を開ける。

バスケットの蓋を開けた沙帆子は、披露宴で公開された写真と、徹からもらった写真が入った箱を胸に抱え込み、急いで立ち上がった。

このまま仕事部屋に移動だ。そしてミッションを成功させるのだ。

頑張れ、わたし！

クローゼットルームを駆け足で出たら、なんと啓史の姿が見え、ぎよっとする。

うわわっ、もう寝室の掃除終わっちゃったの？

驚きのせいで立ち竦すくんでいたなら、薔薇の入ったゴミ箱を抱えた啓史がこちらを振り返った。

ふたりの目がばっちり合う。

きゃーっ！

「なんだ？ 沙帆子、どうかしたのか？」

「は、はい。な、な、なんでもありません」

ああっ、もおっ、わたしときたら、こんなにおどおどしていたら怪し過ぎるし。平然としなきゃ！

なんとか普通に笑おうとするが、顔がひきつってしまふ。

すると、とんでもないことに、啓史はいったん薔薇を下ろして、沙帆子に歩み寄ってきた。

ま、まずいつ！

動転した沙帆子は、くると背を向け、クローゼットルームに逃げ込もうとしたが、あっさり捕まってしまう。

「ああっ、放してください」

「どうしたんだ？ お前、何を抱えてる？」

「し、私物です。勉強机のほうに移動させようと思ってですわ……」

「ふーん。私物を移動させるだけなのに、なんでそこまで動揺してる？」

「べ、別に、わたしは動揺なんて……」

そう言った瞬間、胸に抱えていた箱を啓史に奪われそうになり、沙帆子は必死に抵抗

した。

「だ、駄目です。これだけは駄目なんです」

「この箱、前に見たな」

啓史の言葉に、心臓がバクンと跳ねる。

そのとき、奪い合いをしていた箱が、床に落下した。

「ああっ！」

蓋ふたが外れてしまい、写真が散らばった。

さ、最悪だあ！

「やっぱりか。これ、お前が持ってたんだな？」

「……」

啓史に隠していたことはバレバレで、返事のしようがない。もう泣きたい気分だ。

「おい、なんとか言えよ？」

「……すっ、すみませんでしたあ」

沙帆子は恩赦おんじょを求め、平謝りしたのだった。

## 6 内緒の写真 〔啓史〕

「ぶっ！」

ぺこぺこ頭を下げる沙帆子の姿に、啓史は我慢しきれずに嘖き出した。床に散らばった写真を数枚拾う。それを見て、沙帆子も慌てて屈み込み、写真を拾い始めた。その間にも、啓史の様子をチラチラと窺<sup>うかが</sup>ってくる。

沙帆子は、なぜか啓史が機嫌を損ねていると思っっているようだ。

この写真は徹がくれたものなのだが……実はこれらは、啓史が撮った沙帆子の写真なのだ。

バレーボールの試合中に撮ったもの、そして卒業式に撮ったもの。

結婚式の夜に沙帆子と一緒に見たのだが、そのあとはすっかり忘れていた。

もうひとつ沙帆子は包みを抱えているが、こちらも見覚えがある。これについて以前沙帆子に尋ねたが、なんであるかは教えてくれなかった。

あのときは確か、女の子の秘密の事情とか言っていたと思うが……やはり、教えてくれないのだろうか？ だが、秘密にされると気になるんだよな。

「あの、先生、怒ってます？」

「この写真をお前が持っていることに、なんで、俺が怒ると思うんだ？」

「えっ？」

「どうして驚く？ だって、こいつはお前の写真だぞ」

「あ……ああ、は、はい。そ、そうでした」

その返事に、啓史は眉をひそめた。

なんかこの態度、引かかるな。

沙帆子はまるで啓史の視線を避けるように、必死に写真を拾い集めている。

「なあ、お前、俺になんか隠してないか？」

「えっ？」

ぎよつとしたように沙帆子が顔を上げる。

これはピンゴだな。俺に隠し事があるらしい。

それにしても、こいつときたら、隠し事が下手過ぎる。

「で、何を隠してる？」

そう聞くと、沙帆子は抱えているもうひとつの包みを、何気なさそうにさらに引き寄せた。

そうか。こいつが俺に隠しがっているのは、こっちのほうなんだな。

「沙帆子」

「は、はいっ」

彼女が慌てたように返事をした瞬間を狙い、啓史はもうひとつの包みをかつさらった。

「ああっ！」

「やっぱりか。お前、必死になってこいつを俺から隠そうとしてるよな？」

沙帆子はぎよつとした顔で、瞳を揺らす。

「いったい、これはなんなんだ？」

包みを確認しつつ、問いかける。包みには、新婦様と書いてある。

すると沙帆子はため息を落とし、観念したように「アルバムです」と言った。

「アルバム？」

「その……披露宴で、使われた写真です」

ああ、そうなのか。

沙帆子が必死になって隠していたものの正体が、ようやくわかった。俺と沙帆子の、赤ん坊の頃からいまに至るまでの写真だ。

啓史は包みの中からアルバムを取り出し、パラパラと捲<sup>めく</sup>ってみた。沙帆子が手を出そうとして、引っ込める。

「あ、あのお？」

「お前、帽子は見つかったのか？」

「えっ？」

「帽子だ、帽子。化粧する代わりに帽子を被っていくんだろ？」

「そ、そうですね……その前にアルバム、返して……」

啓史はアルバムを、バン！と、音を立てて閉じた。

思ったより大きな音が出て、沙帆子がびっくりしている。

正直、赤ん坊の自分や、小学生の自分が写っている写真なんてもの、気恥ずかしくて誰の目にも晒<sup>さら</sup>したくない。もちろん、沙帆子にも見られたくないが……

この中には、沙帆子の傑<sup>けさく</sup>作な写真も入っているわけだしな……

俺が、こいつの目に触れないところに隠したんでは、沙帆子は面白くないだろう。かといって、彼女に手渡す気にもなれない。

まったく、やっかいな代物<sup>しろもの</sup>を抱え込んだな。

「まあ、いい。ほら」

考えた末に、啓史は沙帆子にアルバムを返した。

「えっ」

こんなに簡単に返してもらえとは思っていなかったのだろう。沙帆子は目を丸くして、アルバムと啓史を交互に見る。

「ただし、隠すなよ」

「……そ、それはつまり、どうすれば?」

「俺にもわかる場所に置いておけ、ということだ。そうだな。お前の本棚に置けばいいんじゃないか」

啓史からすれば、沙帆子の願いに大きく歩み寄っての言葉だったのだが、彼女は顔を歪める。

「なんだ、不服そうだな?」

「い、いえ……わ、わかりました」

洪々というように頷いた沙帆子は、アルバムを持って仕事部屋に入っていく。

啓史も拾い集めた写真を手し、沙帆子のあとに続いた。

沙帆子がアルバムを本棚に収める。啓史は彼女の机の上に写真を置いた。

「こっちの写真も、アルバムに綴じたほうがいいな。ショッピングセンターに寄れたら、クッションと一緒に買ってくるとするか」

「はい。あ、でも……クッションはもういららないんじゃないですか? これから、車で出かける時は、お化粧するんでしょ?」

「必要なときもあるかもしれないだろ。買っておいたほうがいいさ」

「そうかもしれませんね」

そういえば、徹兄もこいつも見たことがない、沙帆子の写真が、まだあるんだよな。

啓史は徹に内緒で出かけた、沙帆子の中学の音楽祭を思い浮かべた。

あのとときは、沙帆子の声も知らなくて……こいつの声を耳で拾えないことに、馬鹿みにたいに苛立った。

会場が暗かったから綺麗に撮れなくて……

「なあ、沙帆子」

「はい」

「お前の歌が聞きたいな。今度歌ってくれないか?」

「う、歌? どっ、どうして急に?」

「聞きたいからに決まってるだろう」

「でも……そんなにうまくないから……恥ずかしいです」

うまくなかったら、コーラスには選ばれないだろうと言ってやりたかったが、もちろんそれを口にするのはまずい。

「うまかったぞ」

「えっ?」

「結婚式の時、歌ったろ」

「……ああ。そういえば……」

「うん？　なんだ？」

「い、いえ……先生も歌ってたなって思い出しました。あそこらへんの記憶は曖昧なんですけど……うまかった気がします。あつ、それじゃあ、わたしも歌うので……」

「却下だ！」

お願いされる前に、断固として拒否する。

「ええーっ！」

「それじゃ、俺は掃除に戻る。お前は帽子を探しておけよ」

啓史はそう言い置き、さっさと掃除に戻ったのだった。

## 7 至福しふくでいっぱい　～沙帆子～

啓史が部屋から出ていくのを見送り、沙帆子は本棚のアルバムに視線を向けた。

見つかってしまったって、もう駄目かと思ったけれど……こうしておおっぴらに本棚に置くことになつたし、見つかってよかったのかもしれない。隠し続けるって、ストレスになりそうだし。

啓史を追って部屋から出ようとしたのだが、もう一度アルバムに目を向け、思わず手

に取ってしまう。

ちよつとだけ、先生の写真を見てみよう。

最初のページを開き、赤ん坊の頃の啓史を見る。

うわーっ、やつぱり可愛い！　それでいて、男らしさもあるというか……

かっこよさの片鱗へんりんが、すでにこのときから現れておいでだ。

赤ん坊の啓史に会ってみたかった。このとき、自分はまだ生まれていないけど……

そういうえば、映像なんかは残っていないのだろうか？　わたしの映像はパパがビデオ

カメラで撮ってくれていた。運動会のときとか、家族で遊園地に行ったときと

か……

先生に尋ねたところで教えてくれそうにないし、聞くとしたら先生のお母さんだろう

か？

よし、今日お会いしたときに、聞いてみるとしよう。

そう決めて、アルバムに意識を戻す。パラパラと見るつもりが、ついついじっくり見  
てしまう。そのとき、ドアが開いた。

「おい！」

ご立腹モードの呼びかけを食らい、沙帆子は内心ぎゃつと叫んだ。

「それを取り上げられたくないなら、さっさとやることをやれ！」

「わかりましたあ」

沙帆子は慌てふためにアルバムを本棚に戻し、クローゼットルームに舞い戻った。あー、怖かった。

片付けを終わらせたあと、沙帆子は部屋の中を眺め回す。

「さてと……帽子だったね」

どれにしよう？

うーん、これかな？ ツバも大きいし、顔を隠すならこれが一番かもしれない。この帽子に合う服は……

服を選んでいたら、掃除を終えたらしい啓史がやってきた。

「ほう、ここも綺麗に片付いたな」

「完璧じゃないですけど。もつと時間のあるときに、しっかり片付けます」

「これで充分だ。で、帽子はあったのか？」

「はい。これでいいかなって」

沙帆子は帽子を手に取り、被ってみせる。

「いいんじゃないか」

「だけど、これに合う服を選ぶのが難しくくて」

「別に服と合わせる必要はないだろう。帽子を被るのは、車に乗ってるときだけでいい

んだからな」

「それはそうですね……」

啓史は数着、自分の服を選んで手に取った。

「それじゃ、俺は寢室で着替えてくる。お前も、早く支度しろよ」

「えっ、もう出かける時間になっちゃったんですか？」

「いま、九時十五分だ」

啓史は時間を告げると、さっさと行ってしまった。

もう十五分しかないとは……急がないと。

沙帆子はぶら下がっている服を必死に物色し始めた。

「沙帆子。そろそろ行くぞ」

ドアの向こうから啓史が声をかけてきたが、沙帆子は半分上の空だ。

これでいいかなあ？ それとも、もつとシンプルなデザインの服のほうがいいかな？

それにスカートも、もうちょっと長いほうが……うーん……

淡い桃色の上着を取り出し、また悩む。

「沙帆子！」

鋭い呼びかけに、沙帆子はぎょっとしてドアのほうに視線をやった。

「は、はいっ。な、なんですか？」

「なんですかじゃないだろ。早く出てこいって言ってんだ。もう行くぞ」

「わ、わかってますよ。けど迷っちゃって」

「迷う？ 何をだ。開けるぞ」

ドアが開けられ、びっくりした沙帆子は「きゃーっ！」と悲鳴を上げた。

まさか、沙帆子の了解も取らずに、ドアを開けるとは思ってもいなかった。

「なんで悲鳴を上げる？」

「だ、だって、着替えの途中で……」

「どこが途中だ？ ちゃんと着てるじゃないか？」

そう指摘されて、むっとする。

「着てますけど、途中なんです。どれを着ていこうか、まだ迷ってるころなんですから」

ぶつぶつ文句を言うのと、今度は啓史がむっとする。

「いま、着ているものでいい。迷う必要はない」

手首を掴まれた沙帆子は、足を踏ん張って抵抗した。

「まっ、待ってくださいってば。だって、先生のご実家に行くんですよ。ちゃんとした

服装をしていかないと……」

「ちゃんとした服装ってなんだ？ いま着ている服じゃ、ちゃんとしてないってのか？」

「もおつ、先生、わっかんないひとですわねえ。ですからあ……」

唇を尖らせて言ったら、啓史の目が鋭くなった。沙帆子はびくっとして身を竦める。

「な、な……」

泡を食っていると、ぐいっとほっぺたを掴まれた。

「あわわ……や、やめてくははい」

「俺がなんだって？」

「う……うえ……ほ、ほの……ふわひへふへ、あ、あだだ……」

啓史は沙帆子のほっぺたを手加減なく左右に振る。そのせいで、頭がかくかく揺れる。

「ふっ。面白いな」

「おもひほくないれふ」

「俺は面白いんだ」

啓史は楽しそうにそう言ったあと、ようやく沙帆子の頬を放してくれた。

「さあ、行くぞ」

「ええっ！ で、でも……」

「でもじゃない。その服はまったく問題ない。だいたい、それがいいと思ったから、お前、それを着たんだろ？」

そう言われると、反論できない。

「まあ、そうなんですけど……」  
 「適当に着たわけじゃない。いいと思った服を着ている。ならば着替える必要はない」  
 曇たみ掛けるように言った啓史は、置いてあった帽子を取り上げ、沙帆子の頭に勢たいよく被せてきた。

「さあ、行くぞ」

「先生、帽子が深過ぎますよ。目が半分以上隠れて、辺りがあんまり見えません！」  
 抗議しても、啓史は取り合わない。

「顔を見られずにすむからちょうどいいさ」

もう抗あげないと悟とり、沙帆子は足元のバッグを慌あてて拾い上げた。

走行中の車の助手席で、沙帆子は自分の頬に手を当てた。啓史にいたぶられたほっぺだが、まだジンジンしている。

ほんと、手加減がないんだもん。

先生も一度経験してみればいいのだ。そうしたら、この痛みがいかほどのものかわかって、申し訳ありなかつたと反省するに違ちがない。

今朝、無防備に寝ていた佐原先生のほっぺたを、ぎゅぎゅーつと摘あまんて左右に揺ゆすつてやればよかつたかも。

まあ、そんな恐ろしいこと、思うだけで実際はできないけど……

それに、服のことだって……服装ひとつで、印象はだいぶ変わるものなのに……

不安が消えず、沙帆子は着ている服を確認してみた。

ほんとにこれでよかつただろうか？

顔をしかめ、沙帆子は運転している啓史に視線を向けてみた。啓史のほうは、凄く決ままっている。

何を着ても似合うから、悩むことなどないのだろう。羨うらやましい限りだ。

あっ、そういえば、前に服を見立ててくれて言われたんだっけ……わたし、一緒に行くの楽しみにしてるんだよね。いつになったら行けるかな？

「せ……」

呼びかけようとした瞬間、沙帆子はハッとした。『先生』と呼ぶことは、禁止されていたんだ。外では、『啓史さん』と呼ばなければ。

「なんだ、何か話があるんじゃないのか？」

「あっ、はい。服のことを……」

「まだ言うのか？」

不機嫌な返事もらい、沙帆子は慌あてて手を横に振った。

「違います。わたしの服のことじゃなくて、先生の服のことで」

「俺の?」

「あの、それよりも……今日は先生って呼んじや駄目ですよね?」

「当然だ」

「で、ですよ。頑張ります」

「ああ、頑張り」

どうせ駄目だろうが、という啓史の心の声が聞こえてくるようで、沙帆子はむっとした。こ、こうなったら、呼び捨てにして驚かせてやるっ!

息巻いて口を開く。

「けっ、けーしー!」

失敗に終わった。

自分の無様ぶざまさに唇を噛んでいたら、啓史がぷつと噴き出した。さらに、くつくつくと愉快そうに笑う。

「わ、笑わないでください!」

「それで俺の服ってなんだ? 俺の着ている服、どこかおかしいか?」

沙帆子の言葉を曲解まがしたのか、啓史はそんなことを言う。

「違います。先生は全然おかしくありませんよ。服を見立ててくれて、前に言われたことを思い出して」

「ああ。そうだったな。時間ができたらな。いまのところはそんな余裕もないし」

啓史はそう口にしつつ、沙帆子の胸元に視線を投げてきた。

うん? なんかおかしいかな?

目を向けても、どこがおかしいのかわからない。

「チェーンから外して、結婚指輪を嵌はめたらどうだ? 指に痕あとがついたとしても、明日には取れるだろう?」

それって、わたしに指輪を嵌めてほしいってことだよな?

「は、はいっ」

沙帆子は喜びを囁みしめて返事をし、すぐさま首にさげていたチェーンから指輪を外して薬指に嵌めた。

薬指に嵌まった指輪を見て、照れくさくなる。さらに啓史の薬指に嵌まっている指輪を確認すると、じわじわと喜びが込み上げてきた。

「啓史さん」

沙帆子は小さな声で名を呼んでみた。啓史の耳には届かないだろうと思ったのに、彼は「うっ」と呻うなく。

ええっ! い、いまの、聞こえちゃったの?

「き、聞こえ……ました?」

顔を赤らめておずおずと問いかけたら、少し乱暴な手つきで沙帆子の頭に手のひらが置かれた。さらに、帽子をはぎ取られる。

沙帆子は、膝の上に落ちた帽子を思わず手に取った。

「聞こえた……まったく、お前って……」

啓史は前方を見たまま、沙帆子の髪をくしゃくしゃにする。髪を乱されるのは困るが、嬉しさが勝つて文句が言えない。

手はすぐに離れてしまったが、胸は至福でいっぱいだ。

沙帆子は照れ隠しに困った顔をしつつ、帽子を被り直した。

## 8 楽しい言い合い 啓史

ほんとに、油断も隙もない奴だよな。

この俺に不意打ちをかけるとは……

『啓史さん』という微かな呼びかけに、とんでもなくドキリとさせられた。

でも、いまみたいに呼べるようになってくれるのが、理想なんだよな。

咄嗟に出る呼び名が『先生』では、やはりまずい。

赤信号で車を停めた啓史は、隣の沙帆子に目をやった。

啓史より背が低いから、こんな風にツバのある帽子を被っていると、あまり表情が見えない。

逆に言えば、俺がいくら見つけていても、こいつに気づかれないですむということだ。それにしても、さっきは着替えの途中だろうと思って、期待してドアを開けたのに、しっかり服を着ていてがっかりした。半裸状態のところを襲う真似をして、こいつが慌てる様を面白がるうと思っていたのに。

そのとき、沙帆子が小さくため息を吐いた。

沙帆子は気づいているのかいないのかわからないが、啓史の実家が近づくにつれて、どんどん緊張してきているように思える。

俺の実家に行くくらいのこと、緊張することなんかないぞと言いたいが、そんなことを言ったところでリラックスなんてできないだろう。

信号が青になり、アクセルを踏む。

沙帆子が俺の実家に行くのは、今日でまだ三回目か……緊張するのも当然だよな。

沙帆子の左手をちらりと見る。薬指に嵌まっている指輪を見て、いい気分になる。

薬指の指輪に、はじめは啓史もかなり違和感を覚えていたが、いまはそれもない。昨日、沙帆子の祖父母の家を訪問した際は外していたのだが、指輪がないと寂しい気持ち